

ゴークレ政治経済研究所

— Gokhale Institute of Politics and Economics —

マラーッタの古都プーナは、歴史的伝承の町であるとともに、現代インドの政治的覚醒を用意した独立運動揺籃の地でもあった。北西郊外にそびえる荒れはてた岩山の頂上に高さ2メートルにたれぬそまつな記念碑があるが、その碑面には次のような文字が刻まれている。「1905年6月12日黎明、この地において、G・K・ゴークレはThe Servants of India Society 設立の誓いを立て、N・A・ドラウイド、A・V・パトワルダンおよびO・K・デワダルをこれに加えた。」

この岩上の南斜面に、緑の木立と花壇に囲まれたゴークレ政治経済研究所の建物が、背景とは著しく対照的な美しい小世界を構成して、訪れる者の目を奪う。

I 沿革

1930年創立以来、D・R・ガドギルが所長の地位にあり、その発展の跡を顧みる時、かれの個人的着想と手腕の影響が色濃く焼きつけられているのを知る。研究所の設立は、プーナの隣接地域サタラの富裕な弁護士であったR・R・カーレが建設資金をThe Servants of India Society に寄付したことに始まるが、このゴークレの崇拜者カーレはガドギルの義父にあたる。若いかれの指導下にこの小さな研究所はユニークな活動を開始する。

かれは乏しい資金の有効な活用方法を考え、プーナを中心とする都市および農村の実態調査にこれを集中した。1933年に発表された「プーナ果実市場調査」は、比較的等閑に付されていたこの分野の第1弾として学界の注目を集めた。

農業経済実態調査は、インドの農家経営に対応した調査の方法論の確立を必要としたが、「ワイ地区における農家経営調査」(1940年)は資料的価値が高いだけでなく、方法論の提示という意味をももつものであった。

主力を実態調査に置いたことが、理論面での研究を阻害したわけではない。たとえば研究報告 No. 30「経済政策と経済発展」の巻頭を飾るガドギルの「第24回インド経済会議議長演説」は、イギリスの支配下にあったにもかかわらず、インドの経験に基づき西欧の経済学者達を批判し、客観的な経済理論の建設にインドのエコノミ

ストが果たすべき役割を語った格調高いものである。

イギリス支配の終了とインド独立はこの研究所にも転機を与えた。まず Sir Dorabji Tata Trust が資金援助を申し出で、ボンベイ州政府および中央政府も補助金を支出した。同時に研究所スタッフは、中央政府、準備銀行などの実施する諸調査、たとえば Rural Credit Survey, National Sample Survey などに協力することになった。また研究所の国際的評価が高まるにつれ、アメリカのロックフェラー財団およびフォード財団が巨額の寄付を行ない、このため施設の急速な拡張が可能となった。

こうしてスタッフの充実に研究領域の拡大が続いているが、インド経済の実証的研究という創立以来の基本線は貫かれてきている。本年4月、ガドギルの61回の誕生日を記念して、かれの友人と弟子たちが捧げた論文集のタイトルは 'Changing India' というものであったが、これはガドギル終生の研究テーマであると同時に、かれの作り上げたゴークレ政治経済研究所の性格を総括するにたることばである。

II 組織

現在、研究所の規模は人員150名、年間予算約60万ルピー(邦貨にして約4500万円)にまで拡大している。人員のはぼ3分の1が調査スタッフ、次の3分の1が統計機械室に所属する統計家とオペレーター、残りは庶務、図書館勤務者および Postgraduates 教育関係者である。

調査研究員は個室または2人部屋に分散し静寂があたりを支配している。組織上は5つの部に分かれている。

(1) Sir Dorabjee Tata Section 農業経済調査を行っており、この中に農業食糧者の西インド農業調査 Unit がふくまれている。

(2) 人口部。

(3) University Grants Commission Research Sections これは同委員会の補助金によって運営されているものであるが、国民所得、都市経済、農村社会学、応用統計学にさらに細分される。

(4) 経済史部 ここでは Peshwa Daftar の古文書が読まれている。



(The Gokhale Institute 全貌)

(5) インド経済構造部。

若い統計家 D. B. Sardesai 氏を長とする統計機械室は最も活気がある。2 台の I. C. T. (英国製) が動いており、1949年に購入された 36 columns のものは 1961 年センサス・データーの処理、1958 年農業食糧省より貸与された 40 columns のものは Agro-economic Village Surveys & Resurveys データーの処理を行なっている。

図書館は研究所の付属機関ではなく The Servants of India Society's Library であって、同協会設立の当初に作られたものである。ダダバイ・ナオロジーなどのいわゆる Indian Liberalists や会員たちが蔵書を寄贈したことが基礎となって、多数の稀本、国民会議派の議事録、東インド会社時代からのイギリス議会の Blue Book、中央、地方政府の各種報告書が取り揃えられ、歴史、政治、経済、社会の 4 分野に特化した図書館としては、インドで最良のものの 1 つである。現在、蔵書数約 8 万冊、定期刊行物の購入 600 種類となっている。

III 調査活動と業績

調査研究成果の発表は、調査研究報告書 (既刊 40 点) および四季報 Artha Vijnana (1959 年 3 月第 1 号発行) によって行なわれるが、外部の著名人を招いて開かれる R. R. Kale 記念講演会も 23 回に及んでいる。

過去の業績としては、プーナおよび近隣都市の経済・社会調査のほかに灌漑の経済的効果の測定、Sir Dorabji Tata Section が最初の調査として取り上げたマハラシュトラおよびカルナタクの飢饉地帯の経済調査などがある。また V. M. Dandekar, G. J. Khudanpur 両氏の農業立法の調査 (Working of the Bombay Tenancy Act, 1948), 副所長 N. V. Sovani および N. Rath 両氏がオリッサ州政府の依頼を受けて実施した Hirakud 多目的ダムの経済調査 (Economics of a Multiple-Purpose

River Dam, 1960) は著名である。なお N. V. Sovani 氏は長年にわたって人口問題を社会的、経済的に扱っており、インフレーションの研究も行なっている。

最近の活動状況をみると、農業食糧省の農業経済調査 Unit が 1955~56 年に行なった 3 つの農業実態調査地域の再調査を実施しており、人口部は Rural Health Institute と協力して、農村地区における家族計画に対する態度の調査に当たっている。University Grants Commission Sections では、農産物 Market surplus のデーター分析、家計調査データーによる農村地区所得分布と消費支出の研究、1901~53 年の国民所得の長期成長分析、産業連関分析による成長の分析、各種実態調査のデーターの方法論的検討などが行なわれている。

研究所は一昨年、重要な社会・経済問題を取り上げてセミナーを開催する企てを実行に移した。本年初頭に行なわれた Paths to Economic Growth セミナーは世界各地からの代表を集めた国際会議であった。

研究所は、例年 10 名程度の研究者に Research fellowship を賦与して社会科学研究の方法論に関する訓練を施している。修了者で修士号や博士号を取得する者も多い。

研究所の発展につれて、国際交流も活発化してきた。所長ガドギルがインド代表として国際会議にしばしば出席するほか、副所長 Sovani は昨年アメリカの Johns Hopkins 大学の客員教授として招かれていたし、農業経済部長の V. M. Dandekar は、F. A. O. のスタッフとして南アメリカおよびアフリカで調査を行なった経験をもっている。そのほか国際機関や欧米の研究機関で短期間仕事をする者、また研究生として数年にわたって留学する者も多い。外国のエコノミストの来訪も増え、ネパール、セイロンからの留学生が自由な勉強をしている。この傾向はますます将来強化されることになる。

IV 所 感

時代の変遷とともに、研究所もまた変わらざるを得ない。オールド・ゼネレーションの良き代表者である所長ガドギルはインドの伝統的の衣服 dhoti をまとい、かれの人格は研究所のすみずみにまでゆきとどいている感じであるが、アメリカに留学し Westernize された若手の研究者にはかれの精神主義は通用しにくくなっているようである。静謐な研究室でおのの独自のテーマを追求する方式に対し、アメリカで成果を挙げつつある集団研究方式を導入しようとする研究員も多く、この問題に関する部内セミナーが行なわれたばかりである。

研究所スタッフ、研究方式いずれもが新しい時代に対応して脱皮せねばならぬ時期が到来しているのである。

(アジア経済研究所海外派遣員 杉谷 滋)

——在プーナ——